

尾崎翠「第七官界彷徨」論

——「蘇の恋」をめぐる——

山根直子

京都大学大学院 人間・環境学研究科 共生文明学専攻

〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町

要旨 尾崎翠「第七官界彷徨」(『文学党员』一九三一年二月-三月号, 『新興芸術研究』一九三一年六月)には、「人間の恋」と「蘇の恋」が描かれる。作中の「蘇」は雌雄同株(両性具有)のマルダイゴケである可能性が高く、「蘇の恋」は「両性具有の恋」であると考えられる。「両性具有の恋」は、他者を必要としない自己完結した恋である。それは、本作で描かれた「人間の恋」(片思いによる失恋)とも共通する特徴である。翠がこのような自己完結型の恋愛を描いた背景には、フロイトの昇華理論に基づく子を産み育てることへの抵抗があったと考えられる。「失恋」及び人間における「両性具有の恋」は、出産育児に結びつかず、昇華エネルギーを損なう恐れのない恋である。作中で「人間の恋」が全て失恋に終わり、「蘇の恋」が次々と成就することは、「失恋」と「両性具有の恋」こそ、女詩人を目指す町子にとって理想の恋であることを象徴している。

はじめに

尾崎翠「第七官界彷徨」は、まず、『文学党员』(アトラス社、一九三一年二月・三月)に全体の約七分の四まで発表され、その後、板垣鷹穂の要請で全篇が創作ノート『第七官界彷徨』の構図その他と共に『新興芸術研究』(二輯、板垣鷹穂編、刀江書院、一九三一年六月)に発表された。

「第七官界彷徨」は、主人公小野町子が「よほど遠い過去のこと」として、「分裂心理医者」の長兄一助、「蘇¹⁾の恋」と「二十日大根」の研究のために日夜部屋で「こやし」を煮る農学生の次兄二助、音楽学校を目指す浪人生の従兄三五郎と共に「変な家庭の一員」として暮し、「ひとつの恋」をした「秋から冬にかけての短い期間」を語る回想形式の作品である。町子は「変な家庭」の炊事係を「表むきの使命」とする一方、密かに「人間の第七官にひびくやうな詩」を書くという裏の「勉強の目的」を抱いていた。しかし、町子自身、「第七官」がどのようなものかわかってい

なかったため、彼女は「第七官」の定義づけを試みていく。しかし、最後まで明確な「第七官」の定義が提示されることはなく、「第七官にひびくやうな詩」を書く目的を達成できたか否かも明確にされないまま、作品は幕を閉じる。

冒頭文で「ひとつの恋をした」と語られることからわかるように、本作の主要なテーマの一つは「恋」であり、「人間の恋」と「蘇の恋」の二つが描かれる。「人間の恋」としては、一助、二助、三五郎、町子といった「変な家庭」の人間たちそれぞれの恋が語られるが、奇妙なことに全て片思いによる失恋に終わる。一方、「蘇の恋」は、二助の実験対象である蘇の生殖のことを指す。作中で「蘇」は「人類のといひ祖先」とされ、その生殖は人間と同じ「恋愛」と捉えられているのだが、「蘇の恋」は「人間の恋」と正反対に次々と成就する。これは何故なのだろうか。「人間の恋」と「蘇の恋」の違い、「人間の恋」を差し置いて成就する「蘇の恋」とは一体何を意味しているのだろうか。

両者の最大の違いは、その生殖形態であろう。

蘚苔類には雌雄異株の他、雌雄同株で自家受精するものや無性生殖するものがある。しかし、作中の「蘚」の種類は未だ特定されておらず、「蘚の恋」の詳細実態は不明であった。そのため、「蘚の恋」に関する先行研究ではその生態には触れていないものが多い²⁾が、北川扶生子「特集 尾崎翠と林美美子 今甦る、女性作家たち 尾崎翠における身体と民俗」(『江古田文学』二〇〇九年七月)は、『第七官界彷徨』で描かれる「蘚の恋」も、ふたつの性を兼ね備えた、あるいは性別未分化なエロスの表現をめざしているだろう」と述べている。溝部優美子「『第七官界彷徨』——町子の〈ひとつの恋〉」(『国文目白』一九九七年二月)は「蘚の配偶体と呼ばれる部分につく生殖器官には、造卵器(雌)と造精器(雄)があるが、「両方の生殖器が同一配偶体上につく雌雄同株」の蘚は、密やかに自己増幅していく。どこか閉塞的な蘚の恋愛は、町子の中で密やかに生まれ、他者不在で発熱するような感情のかたまりと、アナロジカルに結ばれている」と論じる。しかしいずれも、「蘚の恋」が「ふたつの性を兼ね備えた、あるいは性別未分化」、「雌雄同株」とする根拠を提示していない。おそらく、前述した蘚苔類全体の複数の生殖のパターンを踏まえ、推測したものであろう。

本稿は、北川論文や溝部論文と同じく、「蘚」の生態から「蘚の恋」のありようを考察するものである。先行研究を踏まえ、作中の「蘚」の種類の特定を試みた後、その生態から「蘚の恋」が意味するものを明らかにしたい。

1. 作中の「蘚」の種類

1-1. 「蘚」の種類に関する先行研究

作中の「蘚」の種類に触れた先行研究は極めて少ない。まず、本郷順子「尾崎翠著、小説「第七官界彷徨」」(『日本蘚苔類学会会報』一九九五年四月)は、二助が「蘚」に「こやし」を与えているのを腑に落ちないとしつつも、「とある苔庭では雪の前に下肥をたっぷり与えて冬越しさせる」と耳にしたことがあるとする。しかし、「こやし」を栄養とするコケ(以下、「コケ」類一般をさす

場合に「コケ」と表記する)の種類は挙げていない。

コケの種類に初めて言及したのは、有川智己「コケ学者が読み解く『第七官界彷徨』」(『尾崎翠フォーラム報告集 2013』尾崎翠フォーラム実行委員会、二〇一三年十二月)である。有川論文は、作中で「蘚の花粉」とされているものが実は孢子であり、それが「黄色い」ことから作中の「蘚」はゼニゴケ、またはマルダイゴケである可能性を指摘した。コケの孢子は通常、黒か緑であるため、上記二種は例外的な存在であるという。有川論文に拠れば、ゼニゴケは本作発表当時、小中学校で観察に用いられ、認知度の高い蘚苔類であった。ゼニゴケの孢子は、顕微鏡で覗くと「孢子に混じってバネみたいな弾糸」が存在し、「黄色くてモワモワした印象」である。一方、マルダイゴケは、「非常に美しいコケで、こんもりと群落をつくってその上に孢子体を立て」る。孢子体は「赤く色づき」、「鮮やかな黄色い孢子をつける」。マルダイゴケは古くからコケの教科書、生物学の本で紹介されるコケであり、糞の上に生えるため、「糞ゴケ」とも呼ばれた。通常、コケに「こやし」を与えると枯れるが、マルダイゴケは例外的に「こやし」を栄養とする。黄色い孢子をつくる理由は「ハエにとってのシグナル」であり、「ハエが運ぶ孢子がついてきれいなコケの群落をつくり、そこから鮮やかな色をした臭いにおいの孢子体を作り、ハエに孢子を運んでもらう」。この「特殊な目的のために黄色いネバネバした孢子を作る」のである。しかし、有川論文は作中の「蘚」がゼニゴケ・マルダイゴケいずれの可能性もあるとし、断定には至っていない。

「こやし」を養分とする大きな特徴の一致から、作中の「蘚」はマルダイゴケの可能性が高いように思われる。ただし、作中の「蘚」は次兄二助の卒業研究「肥料の熱度による植物の恋情の変化」の対象となっており、この研究は「蘚」に「高温度肥料」「中温度肥料」「次中温度肥料」「低温度」を与え、どの温度の肥料が最も「蘚の恋情をそそる」のかを実験するものである。作中では、「いちばん熱いこやしが、いちばん早く蘚の恋情をそそる」とされるが、植物に熱い肥料をかけるとい

うのは些か非現実的な実験であり、虚構のようにも思われる。とすれば、「こやし」を養分とすること自体虚構である可能性もある。排泄物を養分とするという大きな特徴の一致がありながら有川論文が断定していないのは、その点に起因しているのかもしれない。

確かに、肥料の温度差が植物の繁殖を左右する実験の例は見当たらないが、肥料作成の過程で加える温度の差が肥料の品質を左右するという実験例は存在する。人糞や家畜の糞などを用いた有機物を肥料化する場合、「腐熟」（バクテリアによる有機物の分解。堆肥化とも呼ばれる）が必要となる。現在、「腐熟」に適した温度には高温と中温の二つの温度帯が存在し、それぞれ働くバクテリアが異なることがわかっている³⁾が、「腐熟」の際の温度差が肥料の品質を左右することは本作発表当時から知られていた。吉田満平『植物生理土壤肥料学』（須原屋、一九〇七年五月）は、第三篇「肥料学」第四章「下肥及其使用法」で、下肥（人糞）を用いる時には必ず「腐熟」させること、「腐熟」の際には大量のアンモニアが揮発し「温度の上昇」が起こるため、石灰などを加えて適宜それを防ぐ必要があることを説いている。また、越川善七『実験肥料書：理化学応用』（越川伊助等、一八九七年五月）も「改良堆積肥料の簡易製造法」で肥料の「腐熟」に於ける「熱度の加減」に触れている⁴⁾。

本作の場合を見ると、二助は人糞を用いた肥料の実験をしている。人糞を用いるからには必ず「腐熟」させることが必要であり、二助が人糞を土鍋で煮ているのは、加熱による「腐熟」作業であると考えられる。「肥料の熱度による植物の恋情の変化」の研究は完全な虚構ではなく、「腐熟」の温度差実験がモデルとなっているものと思われる。したがって、「藓」に「こやし」を与えするという発想も全くの虚構ではなく、ある程度事実を反映していると見てよいのではないだろうか。

そこで、本文の「藓」の描写とマルダイゴケの生態をさらに詳しく比較し、両者の特徴に一致が見られるかどうか検討したい。

1-2. マルダイゴケの特徴

有川論文（前掲）に拠れば、マルダイゴケは胞子体が赤いが胞子は黄色で、高山でしか見られない。胞子体は虫をおびき寄せる臭いにおいを放ち、粘り気のある胞子はハエなどを利用して散布される、という。

さらに、岩月善之助『日本の野生植物 コケ』（平凡社、二〇〇一年二月）に拠れば、マルダイゴケはオオツボゴケ科に属す藓類とされる。雌雄同株で、朔（胞子が入っている部位）は壺のような形で褐色だが、古くなると黒褐色になる。朔菌（朔の蓋が取れたとき、口の周りにある菌状の構造）は十六本。有川論文が挙げているように、高山生で動物の腐った糞や死骸の上に生え、北海道、本州（中部以北）北半球の寒冷地に分布している。また、有川論文では胞子体は赤いとしているが、本書では「朔柄」（胞子体）は「黄赤色～濃い赤褐色」とされており、胞子体自身が黄色を帯びるとする。

1-3. 作中の「藓」とマルダイゴケの特徴の比較

前節で述べたマルダイゴケの特徴を踏まえ、作中の「藓」の特徴と比較していきたい。

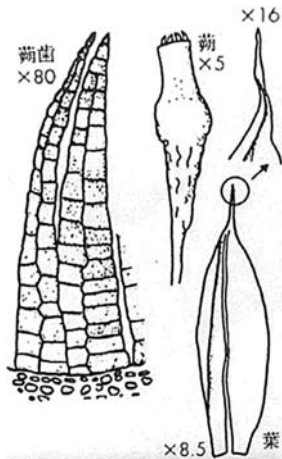
① 黄色い「藓」的花粉

有川論文（前掲）が指摘するように、作中の「藓」的花粉（胞子）⁵⁾は黄色く、マルダイゴケの



村瀬三千男『大植物図鑑索引』（大植物図鑑刊行会、一九二九年九月）

図1 マルダイゴケ



岩月善之助『日本の野生植物 コケ』（前掲）
図2 マルダイゴケの各部位

胞子の色と一致し、黄色い胞子を持つ蘚苔類はマルダイゴケとゼニゴケのみだとされる。

② 排泄物を養分とする

これも有川論文が指摘しているが、作中の「蘚」は人糞を原料にした肥料を養分とする。これは、マルダイゴケが排泄物を養分とする点と一致する。排泄物を養分とするのは、マルダイゴケを初めとするオオツボゴケ科のみの特徴である。

③ 「蘚」という表記

作中の「コケ」は「蘚」と表記されている。蘚類と苔類の違いは、当時既に植物学の専門書や理科の教科書などで解説され、周知であった。三好学編『隠花植物解説：幻燈応用』（進成社、一八八九年三月）では、第八図「蘚類其の一すぎごけ」の項目で蘚類が、第十図「苔類其の一ぜにごけ」の項目で苔類が、それぞれ区別して解説されている。藤井健次郎『植物学教科書：普通教育』（開成館、一九〇二年一月）も、第十章「すぎごけ及ぜにごけ（蘚類及び苔類）」で、「ぜにごけハ蘚類ト異ニシテ、体ハ平タク茎葉ノ区別ナシ」とし、苔類であるゼニゴケと蘚類であるスギゴケの区別をはっきりと記載している。伊藤篤太郎『最新植物学教科書』（三省堂、一九〇三年二月）の第四十章「こけ（すぎごけ）（ぜにごけ）」もまた、コケには蘚類と苔類の二種類が存在し、蘚類の代表としてスギゴケが、苔類の代表としてゼニゴケが解説されている。

植物学の教科書には女子教育専用のものも存在する。東京高等女学会編『女子植物学：表解』（光世館書店、一九二一年九月）第十六章「ゼニゴケとスギゴケ」では、苔類が「一 茎葉の区別なし」「二 植物体は扁平なり」「三 体内に維管束を有せず」「四 胞子を生ず。例 ゼニゴケ、ジヤゴケ」、蘚類は「一に茎葉の区別あり」「二 根を有す。例、スギゴケ、ミツゴケ」と、両者の区別を明確にしている。また、尋常小学校教員用試験教本である教育研究会編『博物学講義：小学校教員検定受験用』（六盟館、一九一一年十月）にも、「第二 隠花植物」の第三章「スギゴケとゼニゴケ」で、ゼニゴケを苔類、スギゴケを蘚類と明確に区別し解説している⁶⁾。

『定本尾崎翠全集 下巻』（前掲）所収「年譜」に拠れば、一九〇九年四月、翠は鳥取県立鳥取高等女学校に入学した。在学中、理数科の成績が特に優秀であったとされ、ここから確実に理科教育を受けていたことがわかる。なお、当時三兄の史郎は岡山の旧制六高理科在学中であった。その後、翠は一九一三年三月に同校補習科に進み、一九一四年三月に卒業した。同年七月から岩美郡大岩尋常小学校に代用教員として勤めたが、一九一七年三月に退職して上京。東京帝国大学農科在学中の三兄史郎と翌年二月まで同居した。このように、翠には学校教育や教員用の教本、史郎を通して、前述した理科の教科書類及び専門書に触れる機会が十分にあったと思われ、蘚類と苔類の区別を認識していた可能性は高いと考える。

そこでマルダイゴケはどうかと言えば、これは蘚類であり、作中の「蘚」の表記と一致する。ちなみに、有川論文がマルダイゴケと共に黄色い胞子を作るコケとして挙げているゼニゴケは苔類である。前述した蘚類と苔類の区別の用例からもわかるように、ゼニゴケは当時から苔類の代表的な存在とされ、蘚類を代表するスギゴケと共に解説されることが多かった。理科教育を受けた翠が、苔類の代名詞のようなゼニゴケを「蘚」と表記するとは考えにくい。翠の従来作品では「コケ」が「苔」と表記されている⁷⁾。ゼニゴケが作中の「蘚」のモデルであれば、従来作品通り「苔」と表記したのではないだろうか。

④ 「私の知らない蘚のやうな植物」

作中の「蘚」は、「私の知らない蘚のやうな植物」と表現されるように、町子が見たことのない種類である。すなわち、この「蘚」は人間の生活圏に存在せず、珍しいものと考えられる。この点、マルダイゴケも高山に生息する珍しい蘚類であり、先の記述と符合する。なお、ゼニゴケは人家の庭で繁殖するとされ、坂内又蔵『誰にも出来る趣味の家庭園芸』（主婦之友社、一九二六年三月）に掲載されるほど身近なコケであるから、作中の「コケ」はゼニゴケではないと考えられる。

⑤ 作中の「蘚」には臭気がある

作中には、二助が「蘚」の匂いを比較する場面がある。

そしてつひに二助は左手の人さし指と拇指に二本の蘚の花粉をとり、一本づつ交互に鼻にあてて息をふかく吸ひこんだ。これは花粉の匂いを比較するための動作で、二助はしづかに眼をつぶり、心をこめて深い息を吸ひこんだのである。

「花粉の匂いを比較」していることから、作中の「蘚」が匂いを持っていることがわかる。また、作中では「蘚の湿地」が「こみいつた臭気を放つてゐた」と表現される箇所もある。これは、マルダイゴケの胞子体が虫媒のために排泄物に似た独特の臭気を放つ点と符合する。臭気は強ければ強いほど虫をおびき寄せることができ、繁殖力の強さを表しているとも言える。「花粉」の匂いを比較することで、二助は蘚の恋情（繁殖力）の強さを確認していたと考えられるが、胞子の散布に虫媒を用いる蘚苔類はマルダイゴケを初めとするオオツボゴケ科のみであり⁸⁾、風媒を用いる一般的な蘚苔類の胞子体は繁殖目的の臭気を持たない。作中の「蘚」はマルダイゴケである可能性が高いといえよう。

このように、作中の「コケ」とマルダイゴケには、有川論文が指摘した上記①②以外にも③～⑤の特徴が一致している。そこで本稿では、作中の「蘚」をマルダイゴケとした上で、その生態から作中の「蘚の恋」について考察していきたい。

2. 「蘚の恋」をめぐって
—— 引き継がれる両性具有のモチーフ

2-1. 両性具有の恋

作中の「蘚」のモデルと思われるマルダイゴケは雌雄同株である。雌雄同株とは、造卵器と造精子器が同じ個体上にできるもので、いわゆる両性具有である。これは、他の個体が存在しなくても自家受精で繁殖できる利点がある⁹⁾。マルダイゴケが雌雄同株であることは、翠の時代に刊行されていた飯柴永吉『日本産蘚類総説』（西ケ原刊行会、一九二九年十一月）でも明らかにされており¹⁰⁾、自家受精についても、石川光春『生殖と遺伝 生殖篇』（南郊社、一九二七年六月）や同『植物学通論 下巻』（内田老鶴圃、一九三〇年九月）などで紹介されている。マルダイゴケ、すなわち作中の「蘚の恋」（生殖形態）とは雌雄同株による自家受精であり、いわば「両性具有の恋」を表しているのではないだろうか。コケ植物は「半数体植物であって、通常の体細胞分裂によって卵と精子がつくられるため、卵も精子もすべて遺伝子的には同質」であり、自家受精で創られる子もまた、親と遺伝的に全く同質であることで知られる¹¹⁾。したがって、「蘚の恋」は自分の分身を創り出す恋と言えよう。

「両性具有の恋」のモチーフは、「第七官界彷徨」との連作とされる「こほろぎ嬢」（『火の鳥』一九三二年七月号）でも、男性でありながら心の中に自らの分身である女性の人格を持っている精神的両性具有の詩人「りりあむ・しやあぶ」として登場する。

ウィリアム・シャープ（William Sharp）は実在した人物で、青山富士夫『20世紀イギリス文学作家総覧 Ⅲ（詩）』（北星堂書店、一九八一年一月）に拠れば、スコットランド出身、本名で詩人・小説家・批評家として活動する一方、女性名フィオナ・マクラウド（Fiona Macleod）を使い、ケルトの物語や詩を書いた。「詩二篇、神々に捧ぐる詩、チャアライ・チャツプリン、キリアム・シヤアブ」（『曠野』一九三一年十一月号）の翠による解説では、十九世紀末のイギリスの神秘詩人

と紹介されている。

森澤夕子「尾崎翠の両性具有への憧れ——ウィリアム・シャープからの影響を中心に——」（『同志社国文学』一九九八年三月）に拠れば、翠がシャープを知った経緯は、シャープ夫人の回顧録『William Sharp (Fiona Macleod) A Memoir』（Heine-mann, 1912）、薄田泣菫「内部両性の葛藤」「女性の芸術」（『象牙の塔』春陽堂、一九一四年八月所収）、木村毅「個人内に於ける両性の争闘」（『新潮』一九二〇年十二月）、松村みね子が翻訳した『かなしき女王』（フィオナ・マクラウド名義、第一書房、一九二五年三月）などを介してとされ、特に、木村毅の論文は翠の短篇「松林」と同じ雑誌の号に掲載されており、翠が木村の論文を読んだ可能性は高いとしている。森澤論文は、これらの典拠ではシャープ/マクラウドは恋人関係でないのに、「こほろぎ嬢」で両者が恋人とされたのは翠の創作であると指摘した。すなわち、翠は「こほろぎ嬢」で意図的に精神的両性具有者の恋、自らの分身への恋を描いているのである。付言すれば、翠作品では翠自身をモデルとした作中人物が多い¹²⁾。翠の恋人であった高橋文雄は「恋びとなるもの」（『尾崎翠全集』「付録月報」創樹社、一九七九年十二月）で、「第七官界彷徨」の作中人物について、「女主人公ばかりでなく、登場する人物の悉くが、〈中略〉すべて先天的失恋患者めいた、作者の詩的分身」であると述べているように、翠作品の作中人物は作者の分身である傾向が強い。これを踏まえれば、「こほろぎ嬢」におけるシャープ/マクラウドの恋は、シャープが分身であるマクラウドに恋をし、自分たちの恋を題材に詩（創作物＝詩的分身）を生み出す行為といえる。他者の肉体を必要とせず、分身に恋し、分身（創作物）を生み出すこと。これは、「蘇の恋」（自家受精）と類似しているのではないだろうか。

2-2. 「両性具有」のモチーフの変遷

両性具有への関心は、「第七官界彷徨」に先行する「新嫉妬価値」（『女人芸術』一九二九年十二月号）で、語り手である女性の「私」と「耳鳴り」と呼ばれる男性が「一つ肉体の中に一緒に棲

んでゐる」という形ですでに表れていた。「私」と「耳鳴り」は、「拙い詩の合作」により生活費を得ている。すなわち、「私」/「耳鳴り」もまた、シャープ/マクラウドと同じ精神的両性具有の詩人なのである。森澤論文（前掲）に拠れば、翠は早ければ一九一二年、遅くとも一九二五年にはシャープ/マクラウドの存在を知ることができたため、「新嫉妬価値」執筆時にシャープ/マクラウドを知っていた可能性は高いだろう。ここでの「私」/「耳鳴り」の関係は、シャープ/マクラウドの関係がモデルなのではないだろうか。「第七官界彷徨」に於ける「蘇の恋」という両性具有の恋は、シャープ/マクラウドの両性具有者の恋、分身への恋を連想させる。「新嫉妬価値」から「第七官界彷徨」、そして「こほろぎ嬢」へと、翠は両性具有、分身というモチーフを引き継いでいるのではないだろうか。

「第七官界彷徨」には、他にもシャープ/マクラウドとの関連を匂わせるモチーフが登場する。まず、本作の主要なモチーフである「分裂心理」からして、シャープ/マクラウドの関係を示す語であった。「こほろぎ嬢」では、マクラウドとシャープの「二人の艶書のやりとり」が、「心理医者」によって「「どつべるげんげる」など難しい呼名のもとに」暴かれるだろうと語られている。「第七官界彷徨」では、『「ドツベル何とか」といふ名前を日本語になほすと「分裂心理学」といふ』とある。すなわち、ここでの「どつべるげんげる」は二重人格、さらには「分裂心理」を意味していると考えられる。「詩二篇、神々に捧ぐる詩、チャアライ・チャツプリン、キリアム・シヤアブ」（前掲）でも、翠はマクラウドを「分^{ドツベル}心^{ゲンゲル}」、シャープを「分裂詩人」と呼んでいる。

第二に、「第七官界彷徨」で町子が理想の詩人とした「女詩人」は、「こほろぎ嬢」におけるマクラウドと、呼称や書いている詩の内容が共通している。すなわち、二人とも「女詩人」「異国」の詩人と表現され、作中人物から「煙」のような詩を書いていたと言われている¹³⁾。これらのことから、「第七官界彷徨」の「女詩人」はマクラウドがモデルではないかと考えられる¹⁴⁾。

前述のように、実際のシャープ/マクラウドは

恋愛関係ではない。「新嫉妬価値」の段階でも、「耳鳴り」と私が恋愛関係にあることを示す描写はない。「両性具有」に「恋」のモチーフが加わったのは「第七官界彷徨」の「蘇の恋」からである。すなわち、シャープ/マクラウドの恋という発想は「蘇の恋」(自家受精)がその基盤にあったのではないだろうか。翠はシャープ/マクラウドの関係から両性具有に関心を持ち(「新嫉妬価値」)、同じ両性具有である「蘇の恋」(「第七官界彷徨」)にヒントを得て、シャープ/マクラウドの関係を恋人関係に発展させた(「こほろぎ嬢」)と考えられる。では、翠が両性具有の恋にこだわったのはなぜなのだろうか。

3. 「両性具有の恋」の背景

3-1. 自己完結した恋——「両性具有の恋」と「失恋」

シャープ/マクラウドの「両性具有の恋」は、先行研究では、「性(エロス)を回避した自己完結的な恋愛の形態」,「肉体不在の恋」¹⁵⁾と指摘されてきた。「自己完結した」他者の肉体を必要としない恋という点は、「第七官界彷徨」で「蘇の恋」と並行して描かれた「人間の恋」の片思いによる「失恋」とも共通する。そこで、人間の側から自己完結した恋について考察したい。

前述したように、作中における「人間の恋」は、全員が相手に想いを告げることなく、自分から勝手にあきらめて「失恋」している。一助と浩六は女性患者に想いを告げることなく、二人で女性患者の所有権を「ありたけの論争」をした挙句、自分から「断念」する。二助は下宿の女の子の涙を叶わない恋を抱く自分に対する同情の涙だと勝手に解釈して失恋する¹⁶⁾。三五郎は町子に「接吻」するが想いを言葉にすることはなく、隣家の女の子が引っ越すと追いかけることなく「失恋」する。町子も旅立った浩六を追いかけて想いを告げようとはせず、一方的に「失恋」の憂愁に沈む。このように、彼等の「恋」はまさに自己完結した恋と言えよう。

また彼等は、まるで想い人と結ばれることがタブーであるかのように想い人と遠く離れる場合が

多い。想い人の肉体は遠くに追いやられ、「不在」になるのである。二助は想い人が住む下宿から離れ、三五郎の想い人である隣家の女の子は引っ越し、町子の想い人柳浩六は旅立つ。作中では、他者の肉体を必要とする恋は忌避されているかのようなのである。それは、冒頭の「ひとつの恋」という語りが示す町子の恋のありように顕著に表れている。

3-2. 三五郎に対する無意識の恋

町子は三五郎と「接吻」し、彼が隣家の女の子と「恋愛期間」に入ると、「失恋者にすぎないやうな気がする」と言って泣くことから、作中には三五郎と町子の恋が描かれているように思われる。しかし、冒頭で語り手は「よほど遠い過去のこと、秋から冬にかけての短い期間を、私は、変な家庭の一員としてすごした。そしてそのあひだに私はひとつの恋をしたやうである」(傍線引用者)と述べる。末尾近くで、「私の恋愛がはじまつたのは、ふとした晩秋の夜であつた」から始まるのが柳浩六との出会いであること、浩六が町子に「くびまき」を買い与え旅立った後に、町子が「われにくびまきをあたへし人は遙かなる旅路につけりといふやうな哀感のこもつた恋の詩」を書いていることから、「ひとつの恋」の相手は浩六であると考えられる。すなわち、三五郎との交渉を語り手である町子は「恋」と捉えていないのである。

溝部論文(前掲)は、「ひとつの恋」と限定する「語り手の言説は、町子が深層心理において三五郎を、意識においては柳浩六を恋している状態にあることをしめし」ており、町子が一助の研究から考察した「分裂心理」の内容¹⁷⁾に照応していると指摘する。たしかに、町子の三五郎への恋心が無意識であったとすれば、町子が「ひとつの恋」と語る点にも合点がいく。溝部論文では挙げられていないが、作中には町子の三五郎に対する想いが無意識であることを暗示する箇所が存在する。「蜜柑」は三五郎の恋に関連するものであり、その恋を象徴するものとして描かれている¹⁸⁾が、町子は上京し、三五郎に再会して二人で家に着いた時、無意識に「蜜柑の網袋」を持っている。

この時私ははじめて気がついた。私の手には蜜柑の網袋がひとつ垂れてゐて、これは私が汽車のなかでたべのこした一袋の蜜柑を、知らないではだかのまま手に垂らして来たものである。 [傍線引用者]

町子が「知らないで」（無意識に）「蜜柑」を持っていることは、三五郎への恋心を無意識に持っていることを意味していると考えられる。また、三五郎が隣家の女の子と親密になった時、町子が自らを「失恋者」と断言せず、「失恋者のやうな気」がすると曖昧な表現をしている点も、町子が三五郎への想いを「恋」と明確に自覚していないことを表していよう。町子の三五郎への恋心は、なんらかの抑圧を受け、識閥下に留まるのである。では、町子にこの抑圧をかけたものはなんだったのか。

溝部論文は抑圧の要因を「祖母の存在がもたらした「兄妹」の認識」、すなわち、近親相姦の恐れだと指摘している。三五郎は従兄であり、本来ならば婚姻可能なのだが、祖母に植え付けられた「兄妹」の認識に囚われ、町子は三五郎との恋を抑圧してしまうというのである。町子は三五郎と「接吻」した際に彼を「兄」と位置付ける連想をしており、たしかに、彼との恋は近親相姦のタブーによって阻まれているように思われる。しかし、町子は断髪し、祖母の影響下からの脱却を果たしていく¹⁹⁾。町子が三五郎を「兄」と認識することが祖母の影響であるなら、その影響から脱していく過程で三五郎への恋心の抑圧も徐々に解かれていくはずである。しかし、町子は三五郎への恋心を「よほど遠い過去のこと」と語る現在においても自覚していない。なぜ、三五郎への恋心の抑圧は解かれなかったのだろうか。

3-3. 昇華理論の影響——翠の恋愛観

ここで、作中で町子が「私が第七官の詩をかくにも失恋しなければならぬ」と述べていることに注目したい。この発言にはフロイトの昇華理論の影響が考えられる²⁰⁾。翠は「『第七官界彷徨』の構図その他」（前掲）で「過去に精神分析に関する二三の書を漫然と散読した」と述べている。

井筒節三『精神分析学』（実業之日本社、一九二二年一月）第八章「芸術活動の心理」には、「フロイトの見解では、芸術は性欲を「浄化」又は「昇華」するものである」とした上で、男性よりも抑圧されることの多い女性はその分創造力に富んでいるはずだが、実際には女性の芸術家が少ないことに疑問を投げかけ、その原因として女性の社会進出に対する制約と、出産育児を挙げている。前者は家父長制の問題だが、後者は昇華理論を踏まえた考えで、女性は子どもという「最も偉大な価値を有する」ものを生み育てるため、芸術を創造する必要がないのだとする。芸術を創造する「昇華」エネルギーは、出産育児によって失われてしまうというのである。

先行研究では、翠作品における他者の肉体を必要としない自己完結した恋の志向は、家父長制社会に取り込まれることへの拒絶が背景にあるとされてきた²¹⁾。しかし、三五郎は町子と同じく芸術の世界に生きようとする人物であり、詩人になりたいという彼女の願望を応援している。こうした三五郎との結婚が町子に家父長制的社会への帰属を強要するとは考えにくい。そもそも、本作で町子は炊事係という家父長制における女性の役割を果たしつつ、詩作を行っている。翠が三五郎と町子の恋を成就させなかった背景には、社会制度への反抗よりも子を産み育てること自体への抵抗が感じられ、そこには昇華理論の影響が考えられる。フロイトの昇華理論に接した翠は、「詩人になりたい」という願望をもつ町子に結婚、出産に繋がる恋を忌避させ、女性芸術家の道を保証しようとしたのではないだろうか。「接吻」するなど、町子の肉体を求めていた三五郎との恋は、進展すれば結婚、妊娠、出産、育児へと繋がる。そこで、翠はその恋が成就しないよう、町子が祖母の影響下を脱した後も、三五郎への恋心に対する抑圧を働かせ続けたのだと考えられる。

作中で町子は一助の分裂心理学の本を読んでおり、「詩を書くにも失恋しなければならぬ」と昇華理論に影響された発言をしている。町子もまた、出産育児を忌避する意識が働いていたのではないだろうか。昇華エネルギーを失う恐れのある肉体を求める恋は無意識に抑圧され、町子の表層

意識では「恋」と認識されない。町子が浩六への想いを「恋」と認識できたのは、彼が旅立ち、その肉体が不在となったことで「失恋」し、抑圧が解かれたためだろう。「ひとつの恋」という語りが示す町子の三五郎に対する「無意識の恋」と浩六に対する「失恋」は、他者の肉体を必要とする恋の忌避、一方的な片思いによる失恋、すなわち「自己完結した恋」である。このような「自己完結した恋」は、昇華エネルギーを失わない女性芸術家の恋のありようであったと考えられる。昇華理論に則れば、女性が芸術家として生きていくには出産育児に繋がる恋は避けなければならないが、その一方で「芸術は性欲を「浄化」又は「昇華」するものである」（前掲井筒『精神分析学』）。「恋愛」²²⁾は必要だが、他者の肉体は遠ざけなければならない。したがって、女性芸術家の「恋」は、「失恋」などの自己完結したものに向かわざるを得ない。本作で描かれた「人間の恋」が全て失恋に終わることも、他者の肉体を必要とする恋の忌避が象徴されていると思われる。

「自己完結した恋」が昇華理論に基づく女性芸術家の理想の恋のありようであるならば、それは、自分の分身に恋をし分身を創り出す「両性具有の恋」（「蘇の恋」・シャープ/マクラウドの恋）にも言えよう。「両性具有の恋」は片思いによる失恋同様、他者を必要としない自己完結型の恋愛である。翠は、シャープ/マクラウドとの出会いによって、「失恋」の他に、「両性具有の恋」というもう一つの自己完結した「恋」の可能性を拓いたのであろう。「こほろぎ嬢」において、シャープ/マクラウドの「やりとり」は「艶書」であり、「詩」（創作物＝詩的分身）を生み出すとされる。恋が成就しても出産育児に至らず²³⁾、昇華エネルギーを失うことのない、むしろその「やりとり」が「詩」を生み出すシャープ/マクラウドの「両性具有の恋」は、まさに女性芸術家の理想の恋と言える。本作で描かれた「蘇の恋」が次々と成就することには、そうした自分の分身に恋をし、分身を創り出す「両性具有の恋」こそ、女詩人を目指す町子にとって理想の恋であることを象徴していたと考えられる。

おわりに

本稿ではまず、「第七官界彷徨」中の「蘇」が雌雄同株（両性具有）のマルダイゴケである可能性の高いことを指摘した。したがって、「蘇の恋」は「両性具有の恋」であると考えられる。「両性具有」は「第七官界彷徨」以前から翠が関心を持っていたモチーフであり、本作において「恋」の要素が追加され、「こほろぎ嬢」のシャープ/マクラウドの恋へと引き継がれたと考えられる。「両性具有の恋」は、他者を必要としない自己完結した恋である。それは、本作で「蘇の恋」と並行して描かれた「人間の恋」の片思いによる「失恋」とも共通する特徴である。翠がこのような自己完結型の恋愛を描いた背景には、先行研究で指摘されてきた社会制度への反抗の他に、フロイトの昇華理論に基づく子を産み育てること自体への抵抗があったと考えられる。女性は子を産み育てることによって、芸術を創出する昇華エネルギーを失う。「失恋」及び人間における「両性具有の恋」は出産育児に繋がらず、昇華エネルギーを損なう恐れがない恋である。作中で「人間の恋」は全て失恋に終わり、「蘇の恋」は次々と成就するが、これは「失恋」と「両性具有の恋」こそ、女詩人を目指す町子にとって理想の恋であることを象徴しているのである。

附記

本文中の尾崎翠「第七官界彷徨」からの引用は『新興芸術研究』（二輯、板垣鷹穂編、刀江書院、一九三一年六月）に拠った。

注

- 1) 本文にルビは無いが、二助が「ねむのはなさけば、ジャックは悲しい」を「こけのはなさけば、おれはうれしい、うれしいおれは」に替えて歌っていることから、作中の「蘇」の読み方は「こけ」と考えられる。
- 2) 小谷真理「特集〈文学のジェンダー構成〉 翠幻想——尾崎翠のメタ恋愛小説」（『日本文学』一九九八年十一月）は、従来の恋愛小説は男性主体のものであったと指摘し、二助によって育てられる「蘇の恋」は、「男によって調整され観察

される人工的な「恋」というシステムの象徴」と捉えている。また、鈴木ちよ『『第七官界彷徨』におけるモチーフ——その意味と役割——』（『研究ノート』三十三、二〇〇五年二月）は、作中で恋愛が成立しているのが「藓」のみであることが「非常に逆説的で風刺的」だとし、登場人物たちの一連の失恋劇は「世間一般の“恋愛”のパロディ」だと指摘している。さらに、土井淑平「特集 尾崎翠と林芙美子 今甦る、女性作家たち ウルトラ・モダンの世界——尾崎翠の方法的な読みの試み」（『江古田文学』二〇〇九年七月）は、「藓の恋」を「人間の恋愛の植物への転移」とし、奥泉光・いとうせいこう「文芸漫談シーズン4(17) 尾崎翠『第七官界彷徨』を読む」（『すばる』二〇一六年四月）も、「藓の恋」を「一種の擬人法」と捉え、「新感覚派の得意技」と指摘している。

- 3) 「家畜ふんの堆肥化では、有機物を分解する微生物として中温菌と高温菌が知られ、高温菌による分解が最も効率が良いとされている」伊藤信雄、福重直輝「通気による最適堆肥温度制御」（『東北農業研究』二〇〇七年十二月）
- 4) 吉田満平『植物生理土壤肥料学』と越川善七『実験肥料書：理化学応用』は「国立国会図書館デジタルコレクション」の納本を参照した。
- 5) ロビン・ウォール・キマラー、三木直子訳『コケの自然誌』（築地書館、二〇一二年十一月）はマルダイゴケと同種のオオツボゴケについて解説しており、それに拠れば、オオツボゴケの胞子体は「コケらしくないピンクと黄色」で、ハエはその色を「花と勘違いして引き寄せられる。ありもしない花の蜜を探してオオツボゴケをつつき回るうち、ハエは胞子にまみれ、胞子の散布に利用されるという。オオツボゴケと同じく鮮やかな色彩を持つマルダイゴケの胞子体も花の擬態であると推測され、本作で胞子が「花粉」と表現されていることは、その点が踏まえられている可能性がある。
- 6) これらの藓苔類に関する資料からの引用は「国立国会図書館デジタルコレクション」の納本に拠った。
- 7) 「若い詩人の津田三郎が苔のやうにこの屋根部屋に住んでゐる」（『詩人の靴』（『婦人公論』一九二八年八月号））、「私は枯れかかつた貧乏な苔です」（『木犀』（『女人芸術』一九二九年三月号））など。
- 8) 「オオツボゴケ科藓類（糞ゴケ）は寒冷な地域に世界的に分布し、主に動物の死骸や糞の上に生育するコケ植物である。これらは、コケ植物のうち、胞子散布を動物（昆虫、主にハエ）に依存している唯一の種群である」上野健、有川智己他「北極氷河後退域におけるオオツボゴケ科藓類（糞ゴケ）の胞子散布」『日本生態学会全国大会 ESJ54 講演要旨』（<http://www.esj.ne.jp/meeting/abst/ESJ54/P2-170.html>）二〇一七年一月九日閲覧
- 9) 秋山弘之『苔の話 小さな植物の知られざる生

態』（中央公論新社、二〇〇四年十月）

- 10) マルダイゴケは以下のように解説されている。

まるだいごけ属 *Tetraplodon* Bryol.eur.

好んで動物物の排泄物の上に生ず。朔は直立ほとんど円、筒形、首は朔よりも長く熟後成長して倒卵形、円錐型、梨形等となり褐赤又黒赤色を呈す、蓋は鈍頭、葉は長披針又倒卵円形錐状、頂生葉の腋に棍棒状の毛あり。♀♂同株、六種地上に生ず本邦に其二を見る。

まるだいごけ *T. angustatus* (L.Sw.) Br.eur.

柄短2-3ミメ葉は楕円状錐形、上半に疎菌あり、肋は錐形の頂に消ゆ、本土及北海道の高山に産す。亜、欧、北米に分布。[傍線引用者]

- 11) 「もしコケ植物において自家受精によって遺伝的に同質な卵と精子が受精すると有性生殖が本来果たすべき役割、つまり遺伝的に異なる卵と精子が会って親とは性質が少し異なる子孫をつくる機能が働かない」秋山弘之『苔の話 小さな植物の知られざる生態』（注9参照）
- 12) 例えば、「こほろぎ嬢」（前掲）のこほろぎ嬢、「地下室アントンの一夜」（『新科学的文芸』一九三二年八月号）の土田九作は共に「屋根部屋」に住み、鎮痛剤の常用者とされるが、執筆当時の作者もまた屋根部屋に住み、鎮痛剤のミグレニンの常用者であった。この他、「屋根部屋」に住む「詩人」は、「詩人の靴」（注7参照）「木犀」（注7参照）「途上にて」（『作品』一九三一年四月号）「第七官界彷徨」（前掲）「歩行」（『家庭』一九三一年九月号）など、翠作品に頻出する人物造形の類型であり、それらは翠自身がモデルであると考えられる。
- 13) 「彼女はいつも屋根部屋に住んでゐた詩人で、いつも風や煙や空気の詩をかいてゐた」（『第七官界彷徨』（前掲）「まくろお嬢は必定雲や霧のやうな柳腰の女ではないであらう！〈中略〉腰の太い女が煙のやうな詩を書くといふ！」（『こほろぎ嬢』（前掲）
- 14) 「第七官界彷徨」の「女詩人」は、町子と「頭髮」が似ている「佳人」とされる。当時の写真は白黒と考えられ、色の類似まで想定されていたか不明だが、彼女が「赤毛」で「佳人」だとすれば、その特徴はマクラウドが発表していたケルト文芸を代表するファムファタルのイメージに重なる。ファムファタルは「運命の女性」を意味するフランス語で、男性の運命を変える女性、男性を破滅させる女性とされる。有元志保「男と女を生きた作家 ウィリアム・シャープとフィオナ・マクラウドの作品と生涯」（国書刊行会、二〇一二年一月）に拠れば、シャープはフィオナ名義で活動を始めて間もなく、「マクラウドのペルソナの維持を負担に感じ始め」、「その心境に呼応するかのよう」に、「多くの作品で女性に魅力と脅威を感じる男性が登場する」ようになった。すなわち、ファムファタル的な女

- 性の登場である。森澤論文が、翠がシャープ/マクラウドを知った経緯の一つとして挙げている松下みね子訳『かなしき女王』（前掲）にも、ファミファタルを思わせる赤毛の女が登場する。例えば、「髪あかきダフウト」のマルグヴェンは見事な赤毛を持ち、「赤き女王」と呼ばれる。彼女は「この世に女といふものが生れて以来、男の心の上にこれほどの魔力を持つ女はまだ一人もなかつたに違ひない」と評され、「海神」、「海魔」、「神族の一人」とされる。マルグヴェンの娘ダフウトも母と同じく見事な赤毛と魔力を持ち、「危険なるダフウト、魔術者ダフウト」と呼ばれる。「第七官界彷徨」の「異国の女詩人」の写真は、マクラウドの作品から想起された、翠が抱いていたマクラウドのイメージではないかと推測される。
- 15) 高橋由香「閉ざされた世界——『こほろぎ嬢』を中心に」（『尾崎翠作品の諸相』専修大学大学院文学研究科畑研究室、二〇〇〇年六月）は、シャープ/マクラウドの関係は「男性性と女性性が同居していることを考えれば、これを「自己恋愛」「内部恋愛」と捉えることも可能であり、「内部（自己）完結的で、閉塞的な特徴」をもつ「性（エロス）を回避した自己完結的な恋愛の形態」であると指摘する。その他、「両性具有の恋」を自己完結した恋と指摘している論考としては、森澤夕子「尾崎翠の両性具有への憧れ——ウィリアム・シャープからの影響を中心に——」（前掲）、三輪初瀬「尾崎翠『こほろぎ嬢』——女詩人の闘い」（『国文目白』二〇〇四年二月）などがある。
- 16) 二助の二十日大根の論文の序文には、下宿の女の子との恋の顛末が書かれている。それに拠れば「余ハ少女ノ泪ヲ以テ、少女ガ余ニ対スル情操ヲ眼臉ヨリ溢ルルモノト解シタルナリ、サレド少女ニハ一人ノ深く想ヘル人間アリテ、ソハ余ノホカノ青年ナリキ。而ウシテ少女ノ泪ハ、少女ガ余ノ悲恋ヲ悲シム泪ナリキ」とある。
- 17) 「これは一人の女が一度に二人の男を想つてゐることにちがひない。けれどこの女はA助を愛してゐることだけ自覚して、B助を愛してゐることは自覚しないのであろう」
- 18) 三五郎の恋が語られる際には、必ずと言っていいほど「蜜柑」が登場する。「垣根の蜜柑」の「発育がおくれ」しており、「さしわたし四分」にすぎない時点では、三五郎は恋をしていない。それが「いくらかうまく」なると、三五郎は町子に恋情を抱く。さらに、「色づくだけ色づく」と、三五郎は隣家の女の子と「恋愛期間」に入り、一緒に「蜜柑」を食べる習慣を持つ。家主の老人に収穫され「私の家庭の周囲には一粒の蜜柑もなく」なると、三五郎の恋は終わる。
- 19) 「町子にとって三五郎の持ち掛けた断髪は、結果的に町子の囚われている祖母の価値観からの脱出に道を開くものであったと言えるのだ」押山美知子「尾崎翠『第七官界彷徨』論——小野町子と「赤いちぢれ毛」について「女くらゐ頭髮に未練をかけるものはないね。」（『尾崎翠作品の諸相』専修大学大学院文学研究科畑研究室、二〇〇〇年六月）、「断髪になってからは、それを布で包み人目を避けていた町子が、「祖母の心」や「人々」の視線に圧倒されずに、自分の髪を隠さず他人の前にさらすことができるようになっていったことは、彼女が「祖母の心」＝「人々」の認識（赤毛ちぢれ毛や断髪を良しとしない）の束縛から脱したことを意味するだろう」峯村至津子「女の髪と非正常世界——「第七官界彷徨」に於ける町子の髪と役割」（『女子大國文』二〇〇一年六月）、「町子の祖母離れを促進させるのが、三五郎による断髪であった。〈中略〉町子は、断髪により祖母の影響下から脱し、更なる精神的な自由を得ることができたのである」三輪初瀬「尾崎翠『第七官界彷徨』試論——町子の彷徨と〈第七官〉」（『国文目白』二〇〇二年二月）、「町子は、断髪を通して祖母の体現する古い価値観・習慣を断ち切り、更に「女の子」という免罪符を手に入れる事によって、自由気ままに動き回り、郷里では不可能に近い様なさまざまな経験を積んで来ることができた」鈴木ちよ「『第七官界彷徨』におけるモチーフ——その意味と役割——」（注2参照）
- 20) 特に米田庄太郎『恋愛と人間愛』には作中の記述との類似が見られる。米田は、「昇華」とは性欲を「自律能動的に高等なる文化価値の実現の目的に転向」させることであり、その例として「失恋」が「何等かの事業、製作或は研究に熱中」させることを挙げているが、作中で町子は「失恋とは〈中略〉人間にいろんな勉強をさせるものであろうか。すでに失恋してしまつた二助は、このやうな熱心さでこやしの勉強をはじめてゐるし、そして一助もいまに失恋したら心理学の論文を書きはじめるのであろうか。失恋とは、おお、こんな偉力を人間にはたらしかけるものであろうか〈中略〉私が第七官の詩をかくにも失恋しなければならぬであらう」（傍線引用者）と述べている。
- 21) 例えば、こほろぎ嬢の「両性具有の恋」への志向は当時の女性規範からの逸脱、社会秩序への反抗であるとされる。「明治以降、天皇制集権国家として発展を続けようとする日本にとって、国家の基盤に置かれたものは家父長制家族制度であり、それを支えるために、女性が結婚をし、出産することは不可欠であった。こほろぎ嬢は、そうした社会的な規制、国家政策に反する恋を望んでおり、社会から著しく逸脱した女性であるといえるだろう」三輪初瀬「尾崎翠『こほろぎ嬢』——女詩人の闘い」（注15参照）、「こほろぎ嬢の「両性具有」への憧れは、単なる個人的な恋や性の問題としてとらえるべきではなく、当時女性に強いられた産む性を拒否し、社会秩序そのものに抵抗しようとする社会問題としてとらえられるべきだろう」金夏娟「尾崎翠『こほろぎ嬢』論——「両性具有」への恋、女詩人の生き方」（『国文』二〇一〇年十二月）

- 22) 「第七官界彷徨」では、蘚の「恋情」を二助が「発情」と表現する場面があり、「恋情」すなわち性欲であることが示唆されている。
- 23) 「両性具有の恋」は、人間の場合、成就しても子を為すことはない。「蘚の恋」の場合は、成就す

れば「子」を為すが、前述したように、それは遺伝的に親と同質の「分身」であり、「蘚の恋」は「分身に恋をし、分身を創り出す恋」が象徴されていると思われる。

A study of “Wandering in the Seventh Sense World” by Midori Ozaki —— through the moss’s love ——

Naoko YAMANE

Graduate School of Human and Environmental Studies,
Kyoto University, Kyoto 606-8501 Japan

Summary A novel by Midori Ozaki, “Wandering in the Seventh Sense World” (1931), describes human love and moss’s love. The moss in the story is more likely to be *T. angustatus* which is monoecious. That is why the moss’s love is regarded as love of the androgyny. The love of the androgyny is self-contained love without needing others. The character of the love of such an androgyny is common to the human love in the story, lost love by the unrequited love. The reason why Midori described self-contained lost love is that there was a feeling to avoid having a child and taking care of a baby. It was based on sublimation theory of Freud. Lost love and the love of the human androgyny do not lead to having a child and taking care of the baby. They do not disturb sublimation energy. All human love ends in lost love by the unrequited love. And moss’s love accomplishes it in sequence. This may say that the lost love by the unrequited love and the love of androgyny were love ideal for Machiko to be a woman poet.